

## 平和を祈る聖地としての護国神社

戦後七〇年以上が過ぎて、全国の護国神社は大きな節目を迎えています。御承知の通り、護国神社とは幕末から先の大戦までの間に、護国の為に命を捧げられた英霊が祀られているお宮です。

時代に応じて神社の役割が変わっていくことは珍しくありません。たとえば全国の稲荷神社は商売繁盛に御利益があると今では信じられています。しかし、主祭神として祀られている神は、うかのみたまのかみ宇迦之御魂神といって元々は稲の精霊で、農耕の神です。それが時代の変遷と共に、五穀豊穰から商売繁盛の神へと変わっていきました。今日、受験合格や交通安全に霊験あらたかといわれる神も、大学受験や車社会になる以前の時代には、そのような御神徳はありませんでした。

大局的に観れば私たちの国はもちろんのこと、世界は戦争のない時代へ向かおうとしています。すると戦没者の慰霊と顕彰、ご遺族の心の拠り所としての役割を果たしてきた護国神社も、戦争のない時代が長く続き、ご遺族の世代交代が進めば、その求められる存在意義も変わっていきます。

しかし私が申し上げたいのは、護国神社も時代の変化に対応を迫られているということではありません。護国神社にこそ、これからの日本国、及び日本人の進むべき道を発信する非常に大きな役割が、他の神社にも増してある、と言いたいのです。

安産祈願、病気平癒、家内安全、良縁祈願、夫婦円満等々、人は様々な願いをもって、神社へお参りします。しかし、護国神社だけは他の神社ではあまり見かけない文言を境内で見かけます。それは「平和」、という二文字です。世界が平和であれば、死ななくて済んだ若者たちが祀られ、戦争さえなければ、悲しい思いをしなくて済んだ、家族や身内の集う場所が護国神社だからです。

人間はどうしても目の前の災難に意識を向け、他人よりも自分や身内の幸せを願いやすいものです。そういう意味では「平和」という人類にとって普遍的な願いも、長く平和を享受してきた戦後世代の日本人にとっては、どうしても後回しになりがちです。

しかし、この「平和」という言葉にこそ、私たち日本人のアイデンティティーがあります。すなわち今から約一四〇〇年も昔に日本国の礎を築き、日本人のあるべき姿を指し示した聖徳太子の、「和を以て貴しと為す」という「和の精神」です。

和食、和服、和装、和紙、和室、和歌、和菓子、和式、和風、和の国。これらの言葉

のルーツを辿れば、日本人の誇りと尊厳はこの精神に帰着するはずです。ですから「平和」という願いを強く抱くことは、普遍的なものであることとは別に、私たちが日本人としての自覚と誇りを再確認するという事なのです。

和の国の民として世界に範を示す大きな使命が日本人にはある、と私は信じています。そして、「平和を祈る聖地」として、その精神を思い出させ、自覚させるという貴い役割が、これからの護国神社にはあるだろうと私は考えています。

また、そうなったときに初めて、護国神社で祀られている英霊の本当の鎮魂が成されたといえるのではないのでしょうか。

九月二十一日の「世界平和の日」に執り行われるこの度の奉納プロジェクトによって、全国の護国神社が世界平和の<sup>よすが</sup>縁となる事を願ってやみません。

和プロジェクト TAISHI 代表

宮本辰彦



岐阜県護国神社

和プロジェクト TAISHI の「TAISHI」は聖徳太子の「太子」、大きな志の「大志」、和と愛を世界へ伝えるアンバサダーとしての「大使」を意味します。2022年の聖徳太子ご聖忌1400年に、「和の精神」が最初に明文化された『十七条憲法』を世界遺産に登録することを目指しています。日本の心であり、宝ともいえる「和の精神」を国内に改めて広く伝え、さらに「WA」という新たな概念（循環と寛容と調和の精神）として世界へ発信するためです。そして、それが今を生きる私たちに課せられた大切な務めであると確信しています。